

240

1363

CONSULATE OF JAPAN
COLOMBO

ハトシ(何モ主人孫管)ナルカ其姉日感懐シ見ルニ
前者ハ排日的色彩濃(厚)シテ後ニ者ハ敢テ親
日的トハ言ヒ得サルモ本邦ニ対シ比較的好意シ
有シ居ルハ其筆致ヨリ見テ明カナル如ク如何セン
海外ニ於ケル事件ノ通報ハ後ニ者トモ總テル「夕
」電ニ依リ居ル關係ト事態ト真相ト知ル
コトヲ得ス後ニ者ノ論説ノ根拠ハ右通信ニ置キ
居ル為事實シ歪曲シテ論シ居ル解カラス此ノ
点特ニ本邦通信機関ノ不備シ遺憾トスル次第
ナリ

次ニ今回ノ北支向題ニ関聯シタイムスハ「日本ハ再ヒ
動フト題シテイリーニス」ハ日本ノ対支政策ナル
表題ヲ掲ケ又「オプザバー」ハ東部戦線異状アリ

S 1.1.10 - 73

644 260

0437

238

1363

CONSULATE OF JAPAN

東亞局
第三課長
第二課長
情報部
第一課長
支那局
自領事館
別紙添付
昭和十一年四月八日 掃

公第三三〇號
昭和十一年十二月十二日
在古倫母
領事乙津鋒次
外務大臣廣田弘毅殿
北支向題ニ関スル当地新聞論調ノ件
当地言論界ノ代表スル新聞機関シ大別スル時ハ
大体ニ於テニ系統ニ分ワトシ得ヘシ即チ「ハ英人申
心主義ヲ奉スル」タイムス「オプザバー」(英人孫管)ニ
シテ他ハ常ニ錫蘭茅(主義)高揚シ居ル「セイロン
テイリー」ニス「虽モ其姉妹紙タル「セイロン」オプザバー」

S 1.1.10 - 73

643 259

0436

242

CONSULATE OF JAPAN
COLOMBO 1363

日本ハ(再ヒ)動ク(十月十九日タイムス)
 (前略)先ニ上海ニ於テハ日本ノ陸海外三者ノ代表者
 カ會合シタフトカアル此ノ會合ニ於テ日本博士ハ
 支那救済ノ方シ建テルニ苦心シテ居タカ今ハ北支
 シ中央南京政府ノ羈絆ヨリ離脱セシムル為北支
 ニ於テ不安釀生ニ多忙シ極メテ居ル背後ニ於
 ケル主動者ハ滿洲事変ノ政治的方面シ牛耳リ
 居タル大肥原少将テアル彼ノ術策ハ今迄非常
 ナル成功ヲ見テ居ルカラ明日ニモ「北支五省聯合自
 治政府」ト言フイカメシイ稱號ノ下ニ北支ハ新滿
 洲國カ出現スルカモ知レヌ日本外交ノ子供テアル此
 ノ新國家ハ滿洲獨立國テサヘモンウテアルカラヌ
 シノ東京ノ統制ヲ受アルテアラウ又日本カ滿洲國

S 1.1.1.0 - 73 646 262 0439

241

CONSULATE OF JAPAN
COLOMBO 1363

トノ題目ノ下ニ何レモ其ノ論說欄ニ於テ大要別紙
 ノ通論シ居ル外三者共ニ窮極ニ於テ日本ヲ難シ
 居ル点ニハ大層ナキモ前者ノ論者カ終始色眼鏡
 的感懷論ニ達リ日本ノ非難シ之事トシ居ルニ及シ
 後二者ノ論調比較的穩健ナルハ三新南社ノ
 好日態度ヲ示ス好適例ト存セラレタルニ依テ論者
 ノ主要点譯出ノ上ハ参考迄爾ニ報告申進ス

S 1.1.1.0 - 73 645 261 0438

REEL No. A-0197



244

CONSULATE OF JAPAN
COLOMBO

1363

フアワタノテ新國家ハ政治的ニ南京ヨリ独立セント
 スルモノテアルカラ南京政府ノ軍事実權者タル蔭
 介石カ支那ノ領土保全ヲ侵害サレサル限リ彼ニ於
 テ日本ノ支那ニ於ケル最近ノ掠奪ヲ各認スル用
 意アリトナス声明ハ意味ヲナサナイ
 日本ハ常ニ機會ヲ捉ヘルコトニ敏捷テアルカアヒニア
 向題ニ對スル歐洲特ニ英國ノ多事ナルト英國支那
 艦隊ノ更典更ニ地中海分遣ハ今コソ支那ニモコト
 深ク喰入ル好機テアルト言フコトシ日本ノ海軍某
 ニ明瞭ニ知ラシメタノテアル新政府カ関稅塩稅及
 鐵道收入ヲ收メントスル事実ハ日本ノ新行動カ南
 京政府ノ新國家ニ對スル僅少ナル支配權ヲ奪
 ヒ去ラントスル程度ニ造計畫實行セラレテ居ルコト

S 1.1.1.0 - 73

648 264

0441

243

CONSULATE OF JAPAN
COLOMBO

1363

場合ニ於ケルカ如ク新國家ト軍事同盟ヲ締結
 シテ日本軍隊ニ依ル其ノ保護ヲ保托スルテアラウ
 コトハ勿論コト、思ハレル右ハ即チ若シ南京政府
 カ此ノ危大ナル地域ヲ再ヒ手ニ入レントスルニハ日本ノ
 實カト衝突スル用意ヲ要スルコトニナルノテアルカ今
 橋ノコトカ國內擾乱ノ場合ニ對シテモ言ヒ得ラレ
 ル假ニ日本軍部ノ支那人手先カ大衆ノ蜂起ヲ鎮
 壓シ難キ場合ニハ日本ハ右軍事機定書ニ基キ
 彼等ノ為ニ其ノ彈圧ニ當ルテアラウ之ヲ簡單ニ言
 ヘハ日本ハ支那ニ於テ復々スハラシキ奇計ヲ運シタ
 コトテアル而シテ日本ハ右地方ヲ其ノ支配下ニ置
 カントスル執拗且打算的方策ヲ其ノ國民性ト
 シテ有名ナル堅忍不拔ノ精神ヲ以テ着々ト進メ

S 1.1.1.0 - 73

647 263

0440



206

1863

東部戦線異状アリ(十月廿二日オブザーバー)
 (前略)日本カ(九三)年滿洲ヲ押へ次テ(九三)三年ニ
 之ヲ独支セシメテ以末日支兩國間ハ殆ト戦時状態
 下ニアツタ即チ上海及滿洲國境ニ於テハ隨所ニ戰
 斗行為カ繰サレタ(九三)三年、支那軍ハ熱河
 コリ驅逐セラレ其結果今省ハ滿洲國、一部ト化
 シタ次テ日本軍ハ長城ヲ越へ北京ニ向テ進發ナリシ
 タカ若シ塘沽ニ於ケル時宜シ得テ休戦カ時局シ
 救ハナカワタナラハ北京ハ恐ラフ日本軍ノ手中ニ歸シ
 テ居テアラウ一方此、向ニ於テ共產軍ハ揚子江
 溪谷ニ其ノ獨立國ヲ樹立シタ、支那政府ハ日本軍
 ノ侵略ト共禍ノ中向ニ決マレ戦争ニ之ヲ寧日ナキ
 有様テアツタ然シ(九三)三年五月ニ署名シ見タ

S 1.1.1.0 - 73: 650 266 0443

245

1863

シ先分ニ記明スルモノテアル又新政府カ日本ト協力
 シテ支那共產党ト戦ハント言フ声明ハ日本カ支
 那匪賊討伐ニ滿洲國ト協力シ居ル事實ニ照シ
 合セテ續マネハナラヌ若シ日本カ其ノ手飼タル兩
 國ニ更ニ幾分カノ領土ヲ加ヘント欲スルトキハ彼
 ハ只目的ノ地域カ共匪ニ侵サレテ居ルト宣言スレ
 ハ良イ然ル後此ノ口実、下ニ爆彈ト銃劍トシ
 以テ該地域ヲ征服シ之ヲ彼ノ屬國ニ與ヘレハ良イ
 ノタ去マ(後略)

S 1.1.1.0 - 73 649 265 0442

247

CONSULATE OF JAPAN
COLOMBO

1363

過大ナル要求ヲ提出シタカ(朝支那側ノ異議
ニ會フヤ日本ハ大部隊ノ軍隊ヲ長城線ニ沿フテ
集中シ飛行機ヲ北京天津ノ上空ニ飛翔サセテ
續テ察哈爾事件ノ勃發ヲ見タテアルカ其ノ結果
今省主席又軍長ハ支那軍並ニ滿洲國軍向ノ
衝突ニ對スル責任ヲ向ハレ強固事件ハ日本軍部
ノ大ニ満足スルニ足ル程度ニテ解決シ見タカ右ハ支
那共和國ノ威信ヲ著シテ失墜スルモテアツタ
假ニ支那カ眞實戰事ヲ開始シテモ支那ニハ全ク
勝味カナイノテアツテ實際ニ滿洲事件ノ二ノ舞
ニ終ル位ノモノテアラウシ又日本ニ對スル新敵對行
爲ハ支那ノ國家的統(シ更ニ妨フルモノトナルテアラ
ウ鬼ノ角急迫シ居ル日支紛争ハ支那統(向

S 1.1.1.0 - 73

652 268

0445

246

CONSULATE OF JAPAN
COLOMBO

1363

塘沽協定ハ支那ニ對シ其ノ國內改造ニ法意シ
集中セシムル機會ヲ與ヘタ此処ニ於テ支那ハ最近
敗退ノ苦汁ヲ嗜メタ北支軍隊ノ助カシ得其ノ國
家的統(ニ向ヒ再ヒ順調ニ事ヲ運ヒマアルカ如ク
ニ見受ケラレタ他方日本ノ對支態度モ根本的ノ
變化ヲ見セ武カニ代フルニ好意ヲ示テ臨ンタカラ
支那モ之ニ應ジテ和協ニ熱心テアツタ斯テ南京
ニ於ケル日本公使ハ大使ニ昇格シタテアル此レニ
此ノ日本ノ新外交方針ハ全ク其ノ軍部首腦者ニ
歡迎セラル、而トナラス却テ之ニ支配セラレ日本ハ支
那ニ對シ北支ニ於ケル報日風潮ノ煽動ニ何等カ
責任アリトノ理由ノ下ニ軍隊ノ移動高級官吏
ノ更迭又諸地方行政機關ノ撤廢等、如キ

S 1.1.1.0 - 73

651 267

0444

REEL No. A-0197

0555

アジア歴史資料センター

249

CONSULATE OF JAPAN
COLOMBO

1363

日本、対支改策(十二月九日デイリーニュース)
 (前略)日本対支ゲーム最近、動キハ北支と者自
 治改權樹立、企畫テアルカ事此処ニ至ラシメテ諸
 般、事態シ見ルト日本、対支改策カ如何ナルカ
 針、下ニ在ルカ、明瞭ニナルナリ、刻下、危機ハフ
 レテソリスリース、ロス卿、対支派遣ニ依テ醸生サ
 レタモノテアル(体支那、通貨、並ニ財政機構改
 革、最緊要事ナルコトハ過去スシキニ一旦リ認め
 ラレテ居タリ不拘日本ハ南京政府、フレテソルフ
 卿招聘ニハ排日的陰謀シ包藏スルモノト疑
 ヒ非常ニ不滿ニアツタ從テ今ス政府カ各月通
 貨及財政ニ関スル或ル種、改革ヲ提案シタ際
 日本、直ニ右ハリスロス卿、鼓吹ニ依ルモノテ

S 1.1.1.0 - 73

654 270

0447

248

CONSULATE OF JAPAN
COLOMBO

1363

題ノ繫カカル肉鍵テアツテ新政府ノ出現ハ重大ナ
 ル意義カアリ又日本カ武力ニ訴ヘテ迄之ヲ強行
 スルトハ更ニ支那ニ苦患シ資スコトニナラフ
 尤モ危機ハ日本、外交手段ニ依リ除去セラルカ
 モ知レナイ何トナレハ其ノ外交ハ過去ニ於テ屢々日
 本政府ノ名ニ於テ北セル多ク、軍部首腦者、高
 圧手段ヲ補助シナカワタモノテアルカラタ(終)

S 1.1.1.0 - 73

653 269

0446

REEL No. A-0197

0555

アジア歴史資料センター

251

CONSULATE OF JAPAN
COLOMBO

1363

ナル提議モ日本ノ嫌忌スル所テアフテ斯ル援助シ
 與ヘントスル外國ノ動機カ全ク裁意ニ基シタモ
 ト雖右ハ日本ニ対スル挑戰トナルノテアル最近
 日本ノ(高官カ述ヘテ曰ク「若シモ借款規カ事
 実テアルナラハ之ハ取モ直サス南京政府ニ求ムルニ
 其ノ絶望状態救済ノ為支那シ賣レト言フニ某
 シフ右ハ既ニ外國ノ半殖民地ト化セル支那シシテ
 英國資本ノ経済的保護領トナシ若テハ日本
 ト致命的対抗ニ導クコトニナルテアラウ」(By the
 rumors are true, they are tantamount to asking
 the Nanking Government to sell China in order to
 relieve their plight. They would make China, which
 is already a semi-colony of foreign countries, a

S 1.1.1.0 - 73

656 272

0449

250

CONSULATE OF JAPAN
COLOMBO

1363

英國又ハ國際的対支借款ノ代償ナリト見做シ
 官也側テハ之シ財政的ニ觀ルヨリハ政治的ニ觀ル
 方ヨリ重要テアルト指摘シテ居ル
 扱本向題ニ対スル日本ノ態度シ諒解スル為ニハ日
 本ノ支那ニ於ケル根本的目的カ外國勢力ノ松
 大防止ニアルコトシ銘記セホハナラヌ日本ハ支那
 シ國際聯盟乃至ハ欧米列強トノ關係ノ域外ニ
 引出シ欧米ノ顧向ニ代フルニ日本人ニ以テシ且日
 支同盟シ強フル某ノ手段ニ依リ前記目的ニ達
 成セント欲シテ居ル依テ國際的援助ニ依ル支那
 ノ更生ハ日本ノ最後ニ欲スル所テアリ又支那ノハ
 日本ノ独占的開拓ト進展ノ為ニ留保セラレホハ
 ナラナイノテアル故ニ対支國際借款ノ開スル如何

S 1.1.1.0 - 73

655 271

0448

253

CONSULATE OF JAPAN
COLOMBO

1363

視塩税及鉄道收入、担保ニ俟タホハナラ又然ル
 ニ北支、如キ広大ナル区域ニ亘リ前記收入カ反
 押ヘラレタ場合如何ニシテ外國借款ヲ行ヒ得ルカ
 ニ思シ致セハ北支自治行政機關カ欧米各國
 ノ対支援助企図ヲ如何ニ完全ニ阻害スルカ、明
 ラカニナルテアラウ。魏ニテ日本、立場カラ言ヘハ現
 在ヲ除テ他ニ北支政权樹立、好機會ハナイ日
 本ハ南京ヨリ政治的経済的ニ独走セントスル新
 政权、樹立ニ依リ西歐諸國、計畫ニ有効ニ挫
 折セシメ他面最近、南京方面向、安懐英國民
 党大會ニ於ケル南京方面向、一般的合作案、
 協議、強過ニヨリ展示セラレタル新ニキ國民的
 統一、効果シ北支カ感知セサル以前ニ南京為

S 1.1.1.0 - 73

658 274

0451

252

CONSULATE OF JAPAN
COLOMBO

1363

Financial prostrate of British capital and would
*lead to fatal competition with Japan")*ト
 斯ル心境、下ニ於テハ國際借款ニ依ル支那通
 貨、安定及經濟復興カ他外國商人ト同様
 ニ日本ノ対支貿易業者ニモ利益シ資ストナス
 議論ハ日本政府ノ印象シ真ヘナイラシイ勿論
 今ノ所歐米諸國カ支那ニ對シ借款ニ決定的ニ申
 込ニテ譯テハナラ夫レハ單ニ過キナイ、テアル
 係シ是等、噂ハ日本ニトフテ斯ル計畫妨害
 ノ手段方法ヲ權セシムルニ充分ニアツタ而シテ日本
 カ其ノ目的、為ニ選ニテ途ハ北支ニ省聯合自治
 政权、樹立テアツタ日本、選ヒ得ル途テ之ヨリ
 有効ナモノハ他ニナカラウ。対支國際借款ハ完

S 1.1.1.0 - 73

657 273

0450

REEL No. A-0197

0569

アジア歴史資料センター

255

第三課長
第二課長
第三課長
外務大臣 廣田 弘毅 殿

A. 1. 1. 1. 0 21-27

情報部
普通第三四三號
昭和十年十二月十三日

在 杭 州
領事代理 松 村 雄

華北自治問題ニ關スル支那新聞論評ノ件

今般ノ華北自治問題ニ關シ當地省黨部機關紙東南日報ハ十二月十日發行ノ同紙ニ「河北事件解決前ニ於ケル最低限度ノ外交對策」ト題シ別紙譯文ノ如キ社説ヲ掲ケタリ、例ニヨツテ皮肉ヲ交ヘ居レルモ從來同紙ノ毒筆的態度ヨリ鑑ミルニ可成リ筆法慎重ノ跡見ユルカ右ハ恐ラク中央黨部及政府方面ノ對日空氣緩和ノ反映ニ

在杭州日本領事館

276
660 0453



254

CONSULATE OF JAPAN
COLOMBO
1363

司ニ對シ時宜ヲ得テ決定的打撃ヲ與ヘルコトニナルヲラウ

要スルニ日本ハ眞ニ前途有望ナケルハシ遣ワテ居ル譯タ而モ日本ハニツ、強イ切札ヲ手ニ有シテ居ル其、(ツハ)蔣介石ノ共匪ニ對スル脅怖ヲ他ハ歐米カ支那ノ侵略保護ノ為危険シ冒スコトヲ嫌フテ居ルコトナル(終)

S 1.1.1.0 - 73 659 275 C 0452

257

1363

河北事件解決前ニ於ケル最低限度ノ
 外交政策
 懸釀久シキ華北ノ政局ハ何應欽北上シ平、津、冀、察ノ各當局及
 日本關東軍ノ首領人物ト屢次折衝ノ結果双方ノ諒解ナリ一時的平
 安ナル具体辦法ナルモノヲ獲タリ、辦法トハ何ソヤ、即チ冀察政
 務委員會ノ設置ナリ、北平ヨリノ電報消息ニ據レハ新行政委員會
 ハ不日成立スヘキカ其ノ委員ノ頗振ハ平、津、冀、察兩省兩市ノ
 現當局及過去ノ北京政府時代ニ於ケル直隸派、安徽派等ノ武人、
 政客等ニシテ日本側ハ東京ヨリノ訓令、支那側ハ中央ノ同意ヲ得
 タル後實現ノ筈ナリ、是ニ於テ一時中外ヲ震憾セシメシ非常變動
 モ干戈相見ミユルコトヲ免レタルカ一方之ニヨリ日本ハ華北ニ於

在杭州日本領事館

S 1.1.1.0 - 73

662

278

0455

256

1363

非ラサルカト愚考ス
 右報告ス
 本信寫送附先

在華大使、在上海、在南京、在天津

在杭州日本領事館

S 1.1.1.0 - 73

661

277

0454

259

1363

レリ、即チコノ最低限度ノ成功ニハ我方ニ於テハ對外折衝及對内
 解釋ニハ辱ヲ忍ンテ只管事ナキヲ求メ多大ノ心遣ト舌辯トヲ費シ
 タル結果名義上ニ於テハ日本側ヨリ幾分讓歩ヲ獲タルモ實際ノ政
 治上殊ニ經濟上ニ在リテハ日本側ガ最後ノ勝利ヲ得タリ惟タ些カ
 我國人ノ諒察ヲ望ムハ自治範圍ノ縮小（五省ヨリ二省ト爲シタル）
 ト土地保全ト政權ノ存在トノミ、今後我方ハ政治及經濟ノ各方面
 ニ於テ事毎ニ日本ト苦痛の親善及提携ヲ表示セサルヘカラス即チ
 双方トモ今後接觸ノ機會及事件ハ必ス増加セン、故ニ宜シク新組
 織未成立ニ先チ相手方ヨリ實際確實ナル次ノ保障ヲ得ヘキナリ即
 チ

一、華北或ハ其他ノ地方ニ於テ再ヒ挑發的ナル軍事行動ヲ採ラ

在杭州日本領事館

S 1.1.1.0 - 73

280
664

0457

258

1363

ケル政治的、經濟的獨占勢力ノ保障ヲ確立シタリ、然レトモ此種
 機關成立ト共ニ日支關係ハ更ニ一層深刻緊迫ノ階段ヲ表示スルニ
 至ルヘシ、我國（支那ヲ指ス）ハ大禍ヲ小禍ニ變セシメ危ヲ轉シ
 テ安キニ爲ス見地ヨリ滿面ニ熱淚ヲ浮ヘナカラ微笑セサルヲ得ス
 、今回ノ結果日本ハ一彈ヲ費サスシテ大ナル効果ヲ收メ虛名ヲ避
 ケテ實利ヲ得タリ、吾人茲ニ於テ誠ニ多クヲ言フヲ欲セサルモ今
 同ノ問題ニ就テノ是非得失ヲ批評シ一言中央及何應欽氏ニ貢獻ス
 ルナキ能ハス

夫レ華北ノ情勢ハ所謂「華北自治國」ヨリ一變シテ「華北五省自
 治委員會」トナリ再變シテ「冀察政務委員會」トナレルカ其間幾多
 ノ迂餘折曲、危疑艱難ヲ經過シ始メテ今回ノ妥協辦法ヲ見ルニ至

在杭州日本領事館

S 1.1.1.0 - 73

279

663

0456

261

東亞局

1363

21-27

公第七八一號

昭和十年十二月十三日

在中華民國日本大使館

大使館一等書記官 武藤 義



別紙添附

外務大臣 廣田 弘毅 殿

胡適ノ論文「華北問題」譯報ノ件

當地北京大學文學院長胡適ハ其ノ主宰スル週刊雜誌「獨立評論」第一七九號（本年十二月一日發行）誌上ニ於テ「華北問題」ト題シ大要別紙譯文ノ如キ論文ヲ發表シ居レルニ付御參考迄別添二部譯報ス

本信寫送付先 大使

天津 南京

在中華民國日本大使館

S 1.1.1.0-73 282 666

0458

260

1363

サルコトヲ表示スルコト
 二、現在表ハシツ、アル辛丑和約及九ヶ國條約ヲ破壞シ又ハ之
 ト類似的ナル行動ヲ停止シ平時常態ニ恢復スルコト
 三、戰區問題及滌東ニ於ケル非法組織ノ徹底的取消及解決ヲ爲
 スコト
 以上三點ハ目前ニ於ケル對日外交政策ニシテ華北事件解決ノ最低
 限度要求ナリ、若シ此ノ最低限度ヲ越ユルニ於テハ國人ニ諒解ヲ
 求ムル道無ク最近ノ五全大會中ニ於ケル外交宣言ニモ符合セサル
 ナリ、吾人ハ茲ニ重ネテ中央及何氏ニ請求スルモノナリ、
 以上

在杭州日本領事館

S 1.1.1.0-73 281 665 0458

263

1363

分テアル吾々ハ曾テ屢々此種國家統一ヲ破壞スル陰謀ニハ反對テアル事ヲ鄭重ニ聲明シタ十一月二十四日北平各大學校長、蔣夢麟、梅貽琦、徐誦明、李焘、陸志韋、諸先生竝ニ各校教員ハ左記ノ宣言ヲ發表シテキル

近來外間ニ民意ヲ偽造シ國家統一ヲ破壞セントスル舉動アリ我等北平教育界同人ハ鄭重ニ宣言ス我等ハ堅ク中央ヨリノ脫離或ハ特殊政治機構ヲ組織セントスル陰謀及舉動ノ一切ニ反對スル我等ハ政府ニ全國的力量ヲ用ヒテ國家領土及行政ノ完整ヲ維持セン事ヲ要求ス

右宣言ハ尠ク共一部分ノ民衆ノ意思ヲ代表シ得ルモノテアル吾々ハ平津ノ當局者カ此民意ヲ充分ニ認識シ得ルモノテアル事ヲ信シテ疑ハナイ

第三吾々ハ華北今日ノ當局ハ皆能ク彼等ノ國家ニ對スル責任ヲ明瞭ニシテキルト信スル彼等ノ責任ハ領土ヲ守護スル事テアル國家ハ廣大ナル土地ヲ彼等ニ任セテキルカラニハ彼等ハ責任ヲ褫トシ轉嫁スル

在中華民國日本大使館

S 1.1.1.0 - 73

668

284

0461

262

1363

華北問題 (獨立評論第一七九號所載)

吾々ハ最近發生シタ所謂「華北問題」ニ對シテ次ノ二ツノ事カ言ヘル即チ第一華北ノ人民ニハ決シテ所謂「自治」或ハ「獨立」ノ運動無キコト第二華北今日ノ當局ハ彼等自己ノ責任ヲ忘ル可カラサルコト是テアル

第一吾々ハ北平當局カ十一月十九日教育界ヲ招待シタ席上テ自ラ述ヘラレタ詳細ナル報告ヲ親シク聞イタカ當局者ノ語ル處ニ依レハ彼等ハ毎日尠ク共三度ハ日本人ヨリ壓迫、強制セラレ宋哲元、秦德純諸先生ニ華北自治ニ對スル態度ヲ決定セン事ヲ迫ツテ居ルトイフ事テアツタ此ノ四十五分間ノ演說中一言モ華北人民ニ斯様ナ要求アルコトニハ觸レナカッタノテアル當時其ノ席ニハ國立、私立各大學ノ校長、院長及其ノ他ノ學術機關ノ代表者カ居タノテアルカ一同ノ者ハ之ヲ聞キ所謂華北自治運動ナルモノハ完全ニ華北ノ人民ト關係無キ事ヲ明カニ得タ次第テアル

吾々北平教育界ニ服務シテキル者ハ一方カラ言ヘハ勿論人民ノ一部

在中華民國日本大使館

S 1.1.1.0 - 73

667

283

0460

事無く積極的ニ責任ヲ負ヒ彼等ノ統治スル地方ヲ守護スヘキテアル
 而シテ領土守護ノ外一切ノ浪人ノ勸誘、政治組織ノ變更ノ如キハ總
 テ顧ル必要ハナイノテアル
 況ンヤ華北今日ノ當局諸公ハ大部分二年前長城一帯ニ於テ國家ノ爲
 ニ苦戰シタ領袖テアツテ彼等ノ愛國の熱誠ハ天下ノ人ノ共ニ知リ共
 ニ視ル所テアル彼等ハ只彼等ノ領土守護ノ責任ヲ他ニ轉嫁シ得サル
 コトヲ知ルヘキノミナラス更ニ今日國家カ既ニ危急ノ暗礁ニ乘リ上
 ケテキル際全國ノ領袖ハ正ニ過去ノ仲違ヒヲ解消シ國家全体ノ統一
 ト團結ヲ謀リ如何ナル區域ト雖モ此ノ時機ニ中央ヨリ脫離シテ外國
 人掩護ノ下ニ獨立區域ヲ作ルコトハ許容セラレサルモノナル事ヲ明
 瞭ニ知ラネハナラヌ
 此ノ全國統一ノ時機ニ在リテ如何ナル種類ナルヲ問ハス若シ統一ヲ
 破壊スル事變カ出現スレハ之ヲ支持スル者ハ必ス全國人ノ痛恨ノ的
 トナリ後世孝子、慈孫ノ永久ニ雪ク事ノ出來ナイ大罪人トナルテア
 ロウ「一度ヒ足ヲ失スレハ千古ノ恨トナル」之ハ正ニ今日吾々ノ最

在中華民國日本大使館

285

0462

S 1.1.1.0 - 73

669

モ牢記スヘキ一句テアル
 更ニ華北當局諸公ハ次ノ事ヲ深ク深ク究悟スヘキテアル即チ今日ノ形
 勢ノ下テハ一切ノ委曲求全ノ計畫ハ總テ空談ニシテ「枉尺而直尋」
 (小ヲ曲ケテ大ヲ直シ大發展ヲナスタメニ多少ノ服従ヲモ忍フ)コ
 トハ絶對ニ出來ナイ我一寸退ケハ人一丈ヲ進ミ屈辱ハ永久ニ止ム所
 無ク求全ハ絶對ニ不可能テアル事ヲソシテ吾々カ防禦シ得ル力ハ屈
 辱ノ止ル所テアリ一切ノ蜜ノ如ク甘キ勸誘ハ總テ子供騙シノ虚言テ
 アル事ヲ
 蕭振瀛先生ハ新聞界及教育界ニ對シ(1)主權ノ不侵犯(2)内政ノ不干涉
 (3)領土ノ不侵略ノ三條件ナルモノヲ報告シテ居ラレカ諸公ハ彼等
 カ華北「自治」ヲ強制スルコトハ正ニ百「パーセント」我主權ノ侵
 犯テアリ正ニ百「パーセント」内政干涉テアリ正ニ百「パーセント」
 我領土ヲ窺フモノテアル事ヲ知ラヌ筈ハアルマイ此等ノ謬説ハ何テ
 輕々シク信スル事カ出來ヨウソ!
 今ヤ局面ハ既ニ斯様ナ工合ニ迄立到ツテキルノテアルカラ當局諸公

在中華民國日本大使館

286

0463

S 1.1.1.0 - 73

670

267

1363

吾々ハ最近發生シタ所謂「華北問題」ニ對シテ次ノ二ツノ事カ言ヘ
 ル即チ第一、華北ノ人民ニハ決シテ所謂「自治」或ハ「獨立ノ運動無
 キコト第二、華北今日ノ當局ハ彼等自己ノ責任ヲ忘ル可カラサルコト
 是テアル

第一、吾々ハ北平當局カ十一月十九日教育界ヲ招待シタ席上テ自ラ述
 ヘラレタ詳細ナル報告ヲ親シク聞イタカ當局者ノ語ル處ニ依レハ彼
 等ハ毎日尠ク共三度ハ日本人ヨリ壓迫、強制セラレ宋哲元、秦徳純
 諸先生^{速ニ}華北自治ニ對スル態度ヲ決定セン事ヲ迫ツテ居ルトイフ事
 テアツタ此ノ四十五分間ノ演說中一言モ華北人民ニ斯様ナ要求アル
 コトニハ觸レナカッタノテアル當時其ノ席ニハ國立、私立各大學ノ
 校長、院長及其ノ他ノ學術機關ノ代表者カ居タノテアルカ一同ノ者
 ハ之ヲ聞キ所謂華北自治運動ナルモノハ完全ニ華北ノ人民ト關係無
 キ事ヲ明カニ得タ次第テアル

吾々北平教育界ニ服務シテキル者ハ一方カラ言ヘハ勿論人民ノ一部

在中華民國日本大使館

S 1.1.1.0 - 73

672

288

(0465

266

1363

ハ責任ヲ回避スルコトモ不可一時ヲ糊塗スルコトモ不可ナル點ヲ明
 ニ認識スヘキテアル華北各省ノ地方官吏ハ彼等ノ職責範圍内ニ於テ
 一切ノ姦人ノ活動ヲ制止ニ必要ナル時ニハ中央ニ上申シテ華北全體
 ノ防衛計畫ヲ商議決定シ其ノ決定ヲ見タル上ハ一切ノ對立の意見ヲ
 解消シ協力一致シテ積極的ニ責任ヲ負ヒ努力シテ進ムヘキテアル

(二四、十一、二四夜)

在中華民國日本大使館

S 1.1.1.0 - 73

671

287

(0464

REEL No. A-0197

0576

アジア歴史資料センター

269

1363

事無く積極的ニ責任ヲ負ヒ彼等ノ統治スル地方ヲ守護スヘキテアル
 而シテ領土守護ノ外一切ノ浪人ノ勸誘、政治組織ノ變更ノ如キハ總
 テ顧ル必要ハナイノテアル
 況ンヤ華北今日ノ當局諸公ハ大部分二年前長城一帯ニ於テ國家ノ爲
 ニ苦戦シタ領袖テアツテ彼等ノ愛國の熱誠ハ天下ノ人ノ共ニ知リ共
 ニ視ル所テアル彼等ハ只彼等ノ領土守護ノ責任ヲ他ニ轉嫁シ得サル
 コトヲ知ルヘキノミナラス更ニ今日國家カ既ニ危急ノ暗礁ニ乘リ上
 ケテキル際全國ノ領袖ハ正ニ過去ノ仲違ヒヲ解消シ國家全体ノ統一
 ト團結ヲ謀リ如何ナル區域ト雖モ此ノ時機ニ中央ヨリ脫離シテ外國
 人掩護ノ下ニ獨立區域ヲ作ルコトハ許容セラレサルモノナル事ヲ明
 瞭ニ知ラネハナラヌ
 此ノ全國統一ノ時機ニ在リテ如何ナル種類ナルヲ問ハス若シ統一ヲ
 破壊スル事變カ出現スレハ之ヲ支持スル者ハ必ス全國人ノ痛恨ノ的
 トナリ後世孝子、慈孫ノ永久ニ雪ク事ノ出來ナイ大罪人トナルテア
 ロウ「一度ヒ足ヲ失スレハ千古ノ恨トナル」之ハ正ニ今日吾々ノ最

在中華民國日本大使館

S 1.1.1.0 - 73

674

290

0467

268

1363

分テアル吾々ハ曾テ屢々此種國家統一ヲ破壞スル陰謀ニハ反對テア
 ル事ヲ鄭重ニ聲明シ十一月二十四日北平各大學校長、蔣夢麟、梅
 貽琦、徐誦明、李蒸、陸志韋、諸先生並ニ各校教員ハ左記ノ宣言ヲ
 發表シテキル
 近來外間ニ民意ヲ偽造シ國家統一ヲ破壞セントスル舉動アリ我等
 北平教育界同人ハ鄭重ニ宣言ス我等ハ堅ク中央ヨリノ脫離或ハ特
 殊政治機構ヲ組織セントスル陰謀及舉動ノ一切ニ反對スル我等ハ
 政府ニ全國的力量ヲ用ヒテ國家領土及行政ノ完整ヲ維持セン事ヲ
 要求ス
 右宣言ハ尠ク共一部分ノ民衆ノ意思ヲ代表シ得ルモノテアル吾々ハ
 平津ノ當局者カ此民意ヲ充分ニ認識シ得ルモノテアル事ヲ信シテ疑
 ハナイ
 第二吾々ハ華北今日ノ當局ハ皆能ク彼等ノ國家ニ對スル責任ヲ明瞭
 ニシテキルト信スル彼等ノ責任ハ領土ヲ守護スル事テアル國家ハ廣
 大ナル土地ヲ彼等ニ任セテキルカラニハ彼等ハ責任ヲ他ニ轉嫁スル

在中華民國日本大使館

S 1.1.1.0 - 73

673

289

0466

27

1363

ハ責任ヲ回避スルコトモ不可一時ヲ糊塗スルコトモ不可ナル點ヲ明
 ニ認識スヘキテアル華北各省ノ地方官吏ハ彼等ノ職責範圍内ニ於テ
 一切ノ姦人ノ活動ヲ制止ニ必要ナル時ニハ中央ニ上申シテ華北全体
 ノ防衛計畫ヲ商議決定シ其ノ決定ヲ見タル上ハ一切ノ對立的意見ヲ
 解消シ協力一致シテ積極的ニ責任ヲ負ヒ努力シテ進ムヘキテアル

(二四、十一、二四夜)

在中華民國日本大使館

S 1.1.1.0 - 73

676

292

0469

27

1363

モ牢記スヘキ一句テアル
 更ニ華北當局諸公ハ次ノ事ヲ深ク深ク究悟スヘキテアル即チ今日ノ形
 勢ノ下テハ一切ノ委曲求全ノ計畫ハ總テ空談ニシテ「枉尺而直尋」
 (小ヲ曲ケテ大ヲ直シ大發展ヲナスタメニ多少ノ服従ヲモ忍フ)コ
 トハ絶對ニ出來ナイ我一寸退ケハ人一丈ヲ進ミ屈辱ハ永久ニ止ム所
 無ク求全ハ絶對ニ不可能テアル事ヲソシテ吾々カ防禦シ得ル力ハ屈
 辱ノ止ル所テアリ一切ノ蜜ノ如ク甘キ勸誘ハ總テ子供騙シノ虚言テ
 アル事ヲ
 蕭振瀛先生ハ新聞界及教育界ニ對シ(1)主權ノ不侵犯(2)内政ノ不干涉
 (3)領土ノ不侵略ノ三條件ナルモノヲ報告シテ居ラレルカ諸公ハ彼等
 カ華北「自治」ヲ強制スルコトハ正ニ百「パーセント」我主權ノ侵
 犯テアリ正ニ百「パーセント」内政干涉テアリ正ニ百「パーセント」
 我領土ヲ窺フモノテアル事ヲ知ラヌ管ハアルマイ此等ノ謬説ハ何テ
 輕々シク信スル事カ出來ヨウソ!

今ヤ局面ハ既ニ斯様ナ工合ニ迄立到ツテキルノテアルカラ當局諸公

在中華民國日本大使館

S 1.1.1.0 - 73

675

291

0468

大臣 次官

電信課長

寫送先

東亞 歐洲 米商 通商 條約 情報 文書 調查 人事 會計 秘書官

1363

1363

昭和10

二〇三三一

12.18 略

上海 本省

十二月十四日夜着

情、亞

有吉大使

廣田外務大臣

第一一〇三號

十三日晨報社説

現今民族精神日ニ衰へ外力ヲ頼ミ自ラ肥サントスル者日日増加シ賣國奴ノ活動愈激シキ處其ノ原因ハ我國ノ誤リタル政策ノ致ス所ナルヲ知ル即チ其ノ一ハ新聞政策ノ誤ナリ我國ノ新聞ハ敵人ニ利用コソセラレ其ノ重大ナル陰謀ニ筆誅ヲ加フルコト絶無ニシテ民族精神ノ防禦線ハ完全ニ破壊セラレタリ其ノ二ハ國民當ノ今日アルハ軍事ノ外民衆運動ニ負フ所多キニ拘ラス數年來民衆運動ヲ壓迫シタル結果

外務省

S 1.1.1.0 - 73

677 293

0470

遂ニ國民精神銷沈シ國事ヲ誤ルニ至レリ今回ノ北平學生ノ行動ヲ彈壓シ居ルカ如キ之ニ依リ全ク民心ヲ失ヒ後悔スルニ至ルヘシ第三ニ官吏ノ任命ニ外國ニ迎合スルハ宜シカラス殊ニ最近ハ日本側ノ要求ニ依リ罷免又ハ任命セラレタル者多ク政府ノ任命權ハ知ラス間ニ日本側ニ移リ國家ノ利害ヲ顧ミサルノ徒カ任命セラレ全ク敵ノ利用ニ供スルカ如キ結果トナルナリ若シ股汝耕ノ如キ叛逆者ヲ根絶セントセハ斯ノ如キ誤リタル人事政策ヲ改メサルヘカラス云々
在支各總領事、北平へ轉電シ上海へ轉報セリ

外務省

S 1.1.1.0 - 73

678

294

0471

電信課長

大臣 次官

1363

東亞 米洲 通商 條約 情報 文書 調查 人事 文書 會計 秘書官

寫送先

274

昭和10 二〇四〇〇 平 倫敦 十四日後發 情、亞
本省 十二月十五日前着

廣田外務大臣 藤井代理大使

第四〇八號

北支情勢ニ關シ其ノ後當地新聞ハ在北支日支當局間ノ冀察政務委員
會組織ニ關スル合意成立、北平支那學生ノ自治運動反對「デモ」、
滿洲軍隊ノ沽源保障占領、殷汝耕ノ關稅鹽稅收入保留、開灤炭坑ノ
納稅期待、中央政府ノ冀察政務委員會職員ノ任命、天津ニ於テ我陸
軍官憲カ北支問題ニ關シテハ南京政府ヲ無視シ新政府委員會トノミ
交渉スヘク北支「ソヴィエツト」化防止ノ爲日支協力ノ實現方ヲ計
ルコト等ニ付重大ナル決定ヲ得タルコト等主トシテ北平電報ニ依リ

外務省

295 679

S 1.1.1.0 - 73

0472

1363

報道シ冀東防共委員會ノ鹽稅等ニ關スル措置及開灤炭坑ノ納稅期待
等ハ相當當地一般ノ注意ヲ惹キ居ル様ナルカ十一日「ガーディン」
カ The out of five 卜題シ日本軍ハ北支五省中河北、察哈爾二省ノミ中
央政府ヲ離レシムルニ成功シタルカ目下ノ處右二省カ那邊迄自治的
ナルヤハ不明ナルカ軍事的ニモ政治的ニモ右兩省ハ重要ナル地點ナ
ルニ鑑ミ關東軍ハ充分満足シテ可ナリトノ短評ヲ爲シタル外演說ヲ
掲ケタルモノナシ
在歐各大使、米ニ郵送セリ

外務省

296 680

S 1.1.1.0 - 73

0473

REEL No. A-0197

0580

アジア歴史資料センター

297

1363

在香港日本總領事館

ナル地位ニ在リ中央政府改組ニヨリ將自ラ行政院長トナリテ責任ヲ負推シ行政機關ニハ全國各派ヲ網羅シ眞ニ全國統合ノ第一歩踏ミ出セル觀アリ。

ト論シ居レリ。

本信寫送付先

在支大使 上海 南京 北平 廣東 臺灣

S 1.1.1.0 - 73

682 298

0475

296

東亞局

1363

21-217

在香港日本總領事館

十二月十一日「サウス、チャイナ、モーニング、ポスト」ハ北支問題ニ關シ支那カ聯盟ニ提訴スヘシトノ議論ヲ最近聞カサルハ不思議ナルカ恐ラク支那ハ此問題ヲ「プレッス」セサルヤウ他ヨリ壓迫セラレタル結果ナルヘク支那ノ忍耐ハ一見怯懦ニ似タルモ國際關係紛糾ノ今日忍耐ハ寧口深慮ナリ。支那ハ今日過去十年間此方最活潑國

外務大臣 廣田 弘毅 殿

在香港 總領事 水澤 孝



China Endures

情報部 普通公第三五七號

昭和十年十二月十四日

第一課長

昭和拾年十二月廿六日接受



S 1.1.1.0 - 73

681 297

0474

279

1363

外務省

(三)冀東防共自治委員會ハ直ニ消滅セシムヘシ
 (四)國治安維持及集會結社言論出版ノ自由ハ我ニ歸シ他人ニ干渉セシムヘカラス
 是等ノ點ヲ嚴重ニ監視セサルヘカラス
 晨報
 行政院各部長決定セル處中樞責任者ハ現今黨國一致團結シ政府並ニ
 黨ノ領袖ヲ新任シ居ルコトヲ深く了解シ此ノ好機ヲ逸セス速ニ民族
 復興ノ大計ヲ決定スヘシ部長中ニハ黨員ニアラサル者アルモ既ニ欣
 然就職シタルハ黨ノ附託ヲ受ケテ共ニ國難ニ當ラントスルモノナル
 ヘク其ノ勇氣ヲ喜フト共ニ今後黨議及黨策ニ依リ其ノ専門家トシテ
 ノ特長ヲ以テ國家ノ爲貢獻セラレ度ク國民ハ政府ヲ信任シタル以上
 ハ其ノ政策進展ヲ靜觀スヘシ政府ハ國民ノ信任ニ酬ユル爲ニハ特ニ

S 1.1.1.0-73 684 300 0477

寫送先

278

次大臣
 東亞
 歐亞
 米洲
 通商
 條約
 情報
 文書
 調查
 人事
 文書
 會計
 會社
 秘書官

電信課長

1363

外務省

昭和10 二〇四九七 略
 上海 十六日夜發
 本省 十二月十六日夜着
 廣田外務大臣
 第一一七號
 十六日漢字紙論說
 時事新報
 冀察政務委員會ハ華北ノ局面安定ノ爲已ムヲ得サル辦法トシテ生レ
 タル畸形的ノモノニシテ之ヲ以テ能ク華北ヲ盤石ノ安キニ置キ我國
 ノ領土及主權ノ完全ヲ期スル爲ニハ
 (一)日支間ノ交渉ハ中央力直接處理スルコト
 (二)經濟機構及財政系統ヲ分割スヘカラス

S 1.1.1.0-73 683 299 0476

支那地方政況 北支政況 自強自足

281

1363

北平、天津、南京へ轉電セリ

外
務
省

S 1.1.1.0 - 73

686 302

(0479

280

1363

外交上國ヲ誤ルコト勿レ既往ノ經驗ニ顧ミルニ
 (イ) 全國總動員ヲ以テ戰フコトモセス切實ニ和モ求メサルカ如キ態度
 ナラハ必ス上海事件當時ノ如ク進退兩難ニ陥ルヘシ
 (ロ) 眞ニ日本ヲ代表シ得ル人物ト交渉セス局部的解決ノ方法ヲ執レハ
 問題ハ擴大スルノミナリ
 (ハ) 地方當局ヲシテ外交ヲ處理セシムレハ益々地方ノ平和ヲ紊スモノ
 ナレハ前轍ヲ踏マス最後ノ決心ヲ以テ最好ク日本ヲ代表スル軍部
 ヲ相手トシテ談判シ平和的解決ヲ圖リ得ル最低限度ヲ示シ其ノ率
 直ナル問題ヲ聞キ其ノ結果交渉スルモ平和的解決ハ絶望ナリト認
 メタルトキハ直ニ最後ノ一滴ノ血ヲモ流ス準備ヲ爲スヘキナリ又
 外交權ハ中央ニ歸セシメ地方ヲシテ處理セシムヘカラス

外
務
省

S 1.1.1.0 - 73

685 301

(0478

282

情報部

1363

分類A門6類/項3目1-3-3

特

大第九二三號

昭和十年十二月十六日

在中華民國

特命全權大使 有吉

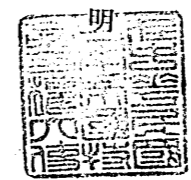
外務大臣 廣田 弘毅 殿

冀察政務委員會ニ關スル件

本件ニ關スル本月十一日附晨報、時事新報及「ジュルナル」ド、シヤンハイ「論說ハ概要及電報置キタル處何等御參考迄ニ右切拔茲ニ送付ス

右所地方政況于係能員
北支政化自胡胡
昭和十年十二月廿日接受

別紙添付



在中華民國上海日本大使館

S 1.1.1.0 - 73 687 303 0480

REEL No. A-0197



アジア歴史資料センター

再論冀察政委會

問題

本報前對於冀察政委會問題，已再三揭示其重要性...

人之勢，以為此乃排日之行動，並謂日使館一等書記官武藤已電請外務省...

殆無不滿，是使吾人悲憤填膺之排華言論與新聞，以助長一般日人之排華侮華心...

昭和拾年三月拾日

再論華北新機關之組織

昨以華北有新機關之組織，曾就冀察二省民族經濟概况有所指陳，意有未盡，爰再申論之。

事實昭示吾人，華北新機關之組織，與其謂為縱的歷史因素之發醇，毋寧謂為由於橫的外部壓力之結果...

此為華北新機關形成經過之大要也。

抑華北新機關之以日本為嚮導，固為衆目昭彰之事實...

使胎兒作不成熟之分娩，顯具有極複雜的國際原因，如英國以地中海惡劣局勢所牽制，無暇顧及遠東...

循日本與英俄之關係，益以美國之觀望，國聯制裁之不及遠東，乃得從容做去，以反俄為藉口，以侵華為實質...

冀察兩省新組織之設立，或可稍慶其食殘之慾望，第是否因新機關之組織，即可措華北於磐石之安...

為悲壯之請願，熱烈之游行，足徵民心未死，事尚可為，是故我人殊不必戰慄於既往，悲觀於現實...

昭和拾年三月拾日

時事新報

Le futur régime du Nord et le Japon

1363

Pendant qu'à Nankin on réorganise le gouvernement chinois, le général Ho Ying-ching s'efforce, avec les principaux chefs militaires du Nord, de régler le nouveau statut du Hopei et du Tchahar, ce qui n'empêche pas que les incidents continuent de se produire dans ces provinces.

D'un côté, les partisans de l'autonomie, jouissant de la protection plus ou moins apparente des autorités japonaises, se livrent à des coups de main sur les bâtiments occupés par les administrations officielles chinoises, de l'autre, les étudiants de Pékin manifestent en faveur du statu quo. En outre, les troupes japonaises font leur apparition dans la zone démilitarisée de façon à rappeler qu'elles pourraient bien intervenir si les pourparlers actuellement engagés traînaient en longueur. Les soldats du Mandchoukouo eux-mêmes, sont entrés en action dans le Tchahar, appuyés par des avions et des tanks et ont lancé contre la ville de Kuyuan une attaque qui ne paraît d'ailleurs pas avoir été très sérieuse.

Pour bien comprendre la situation actuelle, il faut se souvenir qu'à la fin du mois de septembre dernier, le gouvernement japonais a fait connaître qu'il voulait obtenir de la Chine : 1°) la suppression de toute agitation antinipponne ; 2°) une coopération économique étroite de la Chine du Nord avec le Japon et le Mandchoukouo ; 3°) la formation d'un front commun anticommuniste auquel devaient adhérer la Chine, le Japon et le Mandchoukouo.

Au moment même où la presse nipponne publiait cette nouvelle, le général Tada, commandant des troupes japonaises stationnées dans le Hopei, déclarait qu'il ne fallait pas hésiter à séparer les provinces du Nord du reste de la Chine et Nankin s'opposait au rapprochement tel qu'il l'entendait.

Quelque temps après, la question de l'autonomie du Nord se trouvait posée. Les Japonais ne cessent d'affirmer qu'ils ne sont pour rien dans le mouvement autonomiste et qu'ils souhaitent seulement que les Chinois du Nord soient libres de se donner le régime qui leur plaît.

Il n'en est pas moins vrai que des Nippons ont été mêlés à toutes les manifestations autonomistes et que c'est dans la zone démilitarisée, où rien ne peut se faire sans l'assentiment de l'armée du Kwantung, que le premier gouvernement autonomiste a été constitué.

Le gouvernement chinois, en tout cas, sait parfaitement qu'il lui faut choisir entre l'accord avec Tokio et l'hostilité plus ou moins déclarée de l'armée du Kwantung ; il a opté pour l'entente. Seulement, Nankin tient à faire le moins de concessions possible et, avant tout, à maintenir la souveraineté chinoise sur les provinces du Nord. Il s'est opposé à la création d'un gouvernement autonome du Nord, tel que le désirait le général Doihara et il a fait échouer la tentative autonomiste qui était projetée pour le 20 novembre. Son émissaire, le général Ho Ying-ching, a négocié, avec le général Sun Cheh-yuan et ses collaborateurs l'établissement d'un régime de semi-autonomie, compatible avec la souveraineté chinoise. Dans certains domaines importants, tels que les Affaires Etrangères, la Justice et peut-être les finances, l'autorité de Nankin sera maintenue. C'est, du moins, ce qui ressort des informations qui sont parvenues de Pékin.

Il est probable que, si l'on est d'accord sur les principes, on ne l'est pas encore dans le détail ; des tiraillements se font sentir et des incidents surviennent qui sont destinés à impressionner les négociateurs chinois. Cependant, le régime de

semi-autonomie qu'on prépare finit par être établi avec le consentement du gouvernement national chinois et s'il peut fonctionner normalement, il correspondra à peu près à ce que souhaite, sinon l'armée du Kwantung, du moins le gouvernement de Tokio dont les propositions ont été formulées par M. Hirota, le 29 octobre dernier, au cours d'une déclaration faite à l'ambassadeur de Chine.

Le futur régime de semi-autonomie laisserait, en effet, toute latitude aux provinces du Nord pour la coopération économique que réclame Tokio. Cette coopération serait étendue au Mandchoukouo comme, d'ailleurs, l'exige l'intérêt des populations du Nord, qui ont noué depuis longtemps des relations commerciales très étroites avec la Mandchourie. En outre, le front sino-japonais que le gouvernement du Mikado rêve de constituer à la frontière de la Mongolie Extérieure, deviendra vite une réalité lorsque le nouveau conseil de Pékin administrera le Hopei et le Tchahar. N'oublions pas, en effet, que les troupes du gouvernement central, depuis l'accord Ho-Umetsu, ne doivent plus pénétrer dans le Hopei ; les voies ferrées qui donnent accès à la frontière de la Mongolie leur sont fermées. Il n'y aura plus dans le Hopei et le Tchahar que les divisions de Sun Cheh-yuan et de ses alliés ; celles de Shan Chen vont sans doute bientôt partir.

Tels sont les avantages que le Japon retirerait du futur régime du Nord. Ils sont assez considérables pour qu'on puisse espérer que l'armée du Kwantung se déclare enfin satisfaite et que l'Extrême-Orient jouira d'une paix réelle et durable.

0483
306



Le futur régime du Nord et le Japon

1363

Pendant qu'à Nankin on réorganise le gouvernement chinois, le général Ho Ying-ching s'efforce, avec les principaux chefs militaires du Nord, de régler le nouveau statut du Hopei et du Tchahar, ce qui n'empêche pas que les incidents continuent de se produire dans ces provinces.

D'un côté, les partisans de l'autonomie, jouissant de la protection plus ou moins apparente des autorités japonaises, se livrent à des coups de main sur les bâtiments occupés par les administrations officielles chinoises, de l'autre, les étudiants de Pékin manifestent en faveur du statu quo. En outre, les troupes japonaises font leur apparition dans la zone démilitarisée de façon à rappeler qu'elles pourraient bien intervenir si les pourparlers actuellement engagés traînaient en longueur. Les soldats du Mandchoukouo eux-mêmes, sont entrés en action dans le Tchahar, appuyés par des avions et des tanks et ont lancé contre la ville de Kuyuan une attaque qui ne paraît d'ailleurs pas avoir été très sérieuse.

Pour bien comprendre la situation actuelle, il faut se souvenir qu'à la fin du mois de septembre dernier, le gouvernement japonais a fait connaître qu'il voulait obtenir de la Chine : 1°) la suppression de toute agitation antinipponne ; 2°) une coopération économique étroite de la Chine du Nord avec le Japon et le Mandchoukouo ; 3°) la formation d'un front commun anticommuniste auquel devaient adhérer la Chine, le Japon et le Mandchoukouo.

Au moment même où la presse nipponne publiait cette nouvelle, le général Tada, commandant des troupes japonaises stationnées dans le Hopei, déclarait qu'il ne fallait pas hésiter à séparer les provinces du Nord du reste de la Chine si Nankin s'opposait au rapprochement tel que l'entendait To-

Quelque temps après, la question de l'autonomie du Nord se trouvait posée. Les Japonais ne cessent d'affirmer qu'ils ne sont pour rien dans le mouvement autonomiste et qu'ils souhaitent seulement que les Chinois du Nord soient libres de se donner le régime qui leur plaît.

Il n'en est pas moins vrai que des Nippons ont été mêlés à toutes les manifestations autonomistes et que c'est dans la zone démilitarisée, où rien ne peut se faire sans l'assentiment de l'armée du Kwantung, que le premier gouvernement autonomiste a été constitué.

Le gouvernement chinois, en tout cas, sait parfaitement qu'il lui faut choisir entre l'accord avec Tokio et l'hostilité plus ou moins déclarée de l'armée du Kwantung ; il a opté pour l'entente. Seulement, Nankin tient à faire le moins de concessions possible et, avant tout, à maintenir la souveraineté chinoise sur les provinces du Nord. Il s'est opposé à la création d'un gouvernement autonome du Nord, tel que le désirait le général Doihara et il a fait échouer la tentative autonomiste qui était projetée pour le 20 novembre. Son émissaire, le général Ho Ying-ching, a négocié, avec le général Sun Cheh-yuan et ses collaborateurs l'établissement d'un régime de semi-autonomie, compatible avec la souveraineté chinoise. Dans certains domaines importants, tels que les Affaires Etrangères, la Justice et peut-être les finances, l'autorité de Nankin sera maintenue. C'est, du moins, ce qui ressort des informations qui sont parvenues de Pékin.

Il est probable que, si l'on est d'accord sur les principes, on ne l'est pas encore dans le détail ; des tiraillements se font sentir et des incidents surviennent qui sont destinés à impressionner les négociateurs chinois. Cependant, si le régime de

semi-autonomie qu'on prépare finit par être établi avec le consentement du gouvernement national chinois et s'il peut fonctionner normalement, il correspondra à peu près à ce que souhaite, sinon l'armée du Kwantung, du moins le gouvernement de Tokio dont les propositions ont été formulées par M. Hirota, le 29 octobre dernier, au cours d'une déclaration faite à l'ambassadeur de Chine.

Le futur régime de semi-autonomie laisserait, en effet, toute latitude aux provinces du Nord pour la coopération économique que réclame Tokio. Cette coopération serait étendue au Mandchoukouo comme, d'ailleurs, l'exige l'intérêt des populations du Nord, qui ont noué depuis longtemps des relations commerciales très étroites avec la Mandchourie. En outre, le front sino-japonais que le gouvernement du Mikado rêve de constituer à la frontière de la Mongolie Extérieure, deviendra vite une réalité lorsque le nouveau conseil de Pékin administrera le Hopei et le Tchahar. N'oublions pas, en effet, que les troupes du gouvernement central, depuis l'accord Ho-Umetsu, ne doivent plus pénétrer dans le Hopei ; les voies ferrées qui donnent accès à la frontière de la Mongolie leur sont fermées. Il n'y aura plus dans le Hopei et le Tchahar que les divisions de Sun Cheh-yuan et de ses alliés ; celles de Shan Chen vont sans doute bientôt partir.

Tels sont les avantages que le Japon retirerait du futur régime du Nord. Ils sont assez considérables pour qu'on puisse espérer que l'armée du Kwantung se déclarera enfin satisfaite et que l'Extrême-Orient jouira d'une paix réelle et durable.
G. M.

0483

306

287

1363

今回命令ニ依リ日本ノ財政調査ニ出發スルニ當リ恰モ南京ニ於テ
 全國會計師協會第二次代表大會開催ノ時ナリシヲ以テ余ハ廣東會
 計師公會代表トシテ同大會ニ出席シタル後日本ニ赴キタル次第ニ
 テ日本ニ於テハ外務省及大藏、農林兩省並ニ各機關當局ヲ訪問セ
 ル外主計局、鹽務署、稅務署、專賣局ヲ參觀シ更ニ煙草貯藏所、
 各地方專賣局出張所、煙草取扱所、經濟更生部、東京米報事務所
 、産業組合會、帝國農會、中央金庫、神奈川縣愛甲郡中神村役場
 等ヲ實地ニ見學シ何レモ其ノ當局ヨリ懇切ナル接待ヲ受ケ當方ノ
 質問ニ對シテモ詳細ナル説明アリタルカ同國文治派及實業界ハ我
 國トノ親善ト經濟提携ヲ希望シ居レリ余カ日本ニ到着シテ間モナ
 ク上海ノ經濟調查團、北平ノ調查團及各地ヨリ派遣セル調査人員

在廣東日本總領事館

S 1.1.10 - 73

692 308

0485

286

1363
東亞局

A. 1. 1. 10 21-27

公第七二六號
 昭和十年十二月十六日
 在 廣 東
 總領事 河 相 達 夫
 外務大臣 廣 田 弘 毅 殿
 黃仕強ノ日本視察歸來後ニ於ケル感想談報告ノ件
 茲ニ日本ノ財政狀況視察ノタメ渡日セル廣東省財政廳高級職員黃
 仕強ハ本月一日歸來シタルカ新聞記者ニ對シ左ノ通り感想談ヲ發
 表セリ御參考迄

記

在廣東日本總領事館

S 1.1.10 - 73

691 307

0484



昭和拾年十二月十六日接獲

第一課長

289

1363

生ノミヲ收容シ外國女學生ノ志望者ニ對シテハ傍聽生トシテ收容シ居レリ

次ニ農村組織ニ關シテハ中央ト地方ニ分チ更ニ地方農民團體ノ組織アリ例ヘハ農會、産業組合會、産業組合中央會及産業組合中央金庫、地方産業組合等アリテ信用ヲ鞏固タラシメ居ルヲ以テ販賣購買ニ關スル經濟ハ頗ル發達シ居リ日本全國一萬二千ノ鄉村中前記團體ノ組織ヲ有シ政府ノ指導ヲ受ケ居ルモノ已ニ六千村アリ最短期間ニ之ヲ完成セシムル予定ニテ其他土地賣買、金融借款、醫師水利風害^釋凍害害蟲等ニ關スル各種計劃ニ對シテモ亦嚴密周到ナル施設アリ前記ノ組織ヲ創設シタル當時農村中反對スルモノアリタルモ現在ハ已ニ其趣旨ヲ諒解シ贊同スルモノ多シ農家ノ

在廣東日本總領事館

S 1.1.1.0 - 73

694 310

0487

288

1363

前後シテ到着シタルカ日本ノ衣、食、住、行ノ狀態ハ我國ニ比シ經濟的ナルカ故ニ人民ノ生活モ亦安定シ而モ全國一致シテ節約ヲ崇ヒ百貨店ノ品物ハ概シテ國貨多ク舶來品多少アルモ標本ニ過キス日用品ハ低廉ニシテ^奢奢侈品ハ頗ル高價ニ販賣シ舶來品ハ更ニ高價ナリ日本ハ中興ノ國家タルニ拘ハラズ國內人民ノ節約振リ上述ノ通りナル所我國ハ今ヤ國歩艱難ニ瀕シナカラ人民ハ依然トシテ國貨ヲ提倡セス節約ヲ行ハス斯クノ如クムハ果シテ如何ニシテ生存ヲ計ラムトスルヤ

尙同國男女ノ階級ハ相當ノ差別カアリ大体男子ハ外政ニ與リ女子ハ内政ヲ擔當シ居リ女子大學ハ極メテ少ナク僅ニ醫科師範家政等ノ學校ニ依リ賢妻良母ヲ養成シ居ルニ過キス其他各科大學ハ男學

在廣東日本總領事館

S 1.1.1.0 - 73

693 309

0486

290

1363

負債總額ハ約五十億圓ニシテ平均一戸當リ約九百圓ニ達シ主トシ
 テ個人ノ貸借ニ屬シ銀行ヨリ借受ケタルモノ少數ナリ、云々
 本信寫送附先 在支大使

在廣東日本總領事館

S 1.1.1.0 - 73

695311

0488

REEL No. A-0197

0590

アジア歴史資料センター

292

1363

十九世紀後半ノ帝國主義全盛期ニ於テモ此ノ様ニ早ク且ツ無造作ニ帝國力建設サレタコトハナイ日本ハ東亞「モンロー」主義ヨリ出發シ米國サヘ「モンロー」主義ニヨリ西半球ニ於テ爲シ遂ケ得ラレナカツ所ヲ獲得シタ即チ支那自身ノミナラス西洋諸國モ亦日本ノ爲ニ征服サレタ英米兩國ハ九國條約ノ有效性ヲ主張シタカ日本ノ爲シ遂ケタ所ニヨリ同條約ハ無效トナツタ同條約ヲ復活シヨウトイフナラ最早ヤ實力ニヨル外ナイ

外務省

S 1.1.1.0 - 73

697 313

0490

寫送先

291

次官 大臣
 東亞 歐洲 通商 條約 情報 文部 調查 人事 文書 會計 秘書官

次官 大臣

1363

電信課長

昭和10 二〇六八三 平 本省 十二月十八日後着 情
 廣田外務大臣
 特情 紐育第四八號
 「ナサニエル、ベツファア」氏ハ十五日ノ紐育「タイムス」紙ニ於テ北支那ノ情勢ヲ論シテ曰ク
 河北、察哈爾兩省ニハ自治制カ宣布サレタカ地理的、戰略的、政治的、經濟的ニ見テ此等ノ二省ト綏遠、山西、山東ノ三省トノ間ニ自的的境界無ク後者ハ漸次前者ニ接近スルタラウ日本ハ始メテ支那本部ニ足場ヲ作ルコトニ成功シ極東ニ於テハ更ニ歴史ニ新タナ頁カメクラレタ日本ハ四年足ラスノ間ニ他ノ列強カ一八四二年カ一八九一四年ニ至ル間ニ爲シ遂ケタ以上ノ仕事ヲヤリ遂ケタ

外務省

S 1.1.1.0 - 73

696 312

0489

294

1363

ト動カナカッタ、北支那ニ關シ日本政府ハ南京カラノ總ユル干涉ニ
 反對ノ意嚮ヲ表明シタカ其ノ後自己ノ非ヲ悟ツテ結局妥協シ次テ頗
 ル親日的顔觸ノ支那新内閣力成立シタ、河北、察哈爾兩省ハ可成リ
 廣範圍ノ自治ヲ得タカ南京政府ハ將來トモ其ノ官吏ヲ任免シ軍ノ財
 政、司法、外交ヲ支配スル筈テアル、右取極ニ依リ北支那ニ於ケル
 日本ノ地位ハ著シク強化サレタカ取極ノ實行及解釋ハ將來ニ殘サレ
 テ居ル、支那殊ニ北支那ニ於ケル取極ハ如何様ニモ解釋サレル様ナ
 漠然タル言葉テ出來テ居ル、此ノ場合モ日本政府當局ハ右二省ノ政
 務委員會ヲ眞ニ自治的ト見テ居ルカ支那ノ地方有力者ハ何等南京ト
 ノ關係ヲ絶タヌト言ツテ居ル、他方冀察政務委員會ノ構成ニ當ツテ
 ハ中央政府力重要人物ノ任免ニ干與シタ爲支那人ヲ喜ハセタカ日本

外務省

S 1.1.1.0 - 73 699 315 0492

寫送先

293
 秘書官
 會計書事
 文人
 調查
 情報
 條約
 通商
 米洲
 歐亞
 東亞

大臣 次官

電信課長

1363

支那地方政況不修雜頁本
北支政況
自送

昭和10 二〇七七二 平 本省 十二月十九日後着 情
 廣田外務大臣
 藤井代理大使
 特情 倫敦第八九號
 「タイムス」紙十八日ノ紙上ニ「北支那ニ於ケル喜劇」ト題スル社
 説ヲ掲ケ次ノ如ク論シテ居ル
 最近幕ヲ閉チタ北支那劇ハ役者ハ從來同様タツタカ筋力少シ違ツテ
 居タノテ觀衆ニ謎ヲ投シタ、一番變ツテ居ル點ハ南京政府カ日本政
 府ノ柔術ニヨク抵抗シテ豫期以上ノ成功ヲ收メタコトテアル、二月
 程前關東軍ハ北支那五省ノ完全ナ獨立ヲ主張シ北支那ト南京トノ連
 絡ヲ斷チ自治ノ假想ノ下ニ一種ノ緩衝國ヲ設立シヨウトシタカ失敗
 ニ歸シタ自治運動ハ專ラ煽動者ニ依リ數行サレ北支那ノ役人ハ殆

S 1.1.1.0 - 73 698 314 12.21 0491

寫送先

東亞 歐亞 米洲 通商 條約 情報 文書 調查 人書 文書 會計 秘書官

大臣 次官

電信課長

1363

1363

カ使面察哈爾國境ニアル六州ヲ滿洲國ニ加ヘヤウトシテ居ル所ヲ見
 ルト日本軍部ハ「オートノミ」ト「アナトミー」トヲ混同シテ居
 ルト見ラレル北支那ニ於ケル日本ノ窮極目的モ單ニ戰略的テ且ツ有
 事ノ際滿洲國防禦ノ爲側面ノ要害ノ地ヲ確保スルニアルノカ將又支
 那ヲ強制シテ日本ト同盟セシメヨウトスルノカ明テナイ更ニ重大ナ
 ノハ日本外務省ノ態度テアル、先週外務省ノ「スポークスマン」ハ
 九國條約ヲ酷評シテ世界ハ動クカ條約ハ動カス北支那ニ關シテハ九
 國條約ハ失效シタト思惟スル様子タカスル見解ハ英米兩國テハ受容
 レラレヌ意見テアル「スポークスマン」カ「ホーア」外相及「ハル」
 國務長官ノ聲明後倫敦會議開催前ニ以上ノ如ク聲明シタノハ一層意
 味カ深イ

外務省

S 1.1.1.0 - 73

700 316

(0493

昭和

10

二〇八〇六

略

上海

十二月二十日夜着

情、亞

廣田外務大臣

有吉大使

第一一三一號

本使發北平宛電報

第五九號

貴地十九日)發路透電ハ同日正午多田司令官ノ來平ヲ傳ヘ支那側情
 報ニ依ルトシテ右ハ天津ニ於ケル自治運動ノ示威運動ノ失敗後同司
 令官ト土肥原少將トノ間ニ起リタル誤解ヲ解カセカ爲ニシテ土肥原
 少將ハ多田司令官カ示威運動者ヲ援助セサリシヲ不快トシ居リ東京
 ハ兩名ノ間ヲ調停センカ爲喜多大佐ヲ派遣シタルカ同大佐ノ使命ハ

外務省

S 1.1.1.0 - 73

701 317

12.20.494

寫送先

298

電信課長
東亞
歐亞
米洲
通商
條約
情報
文部
調查
人書
文書
會計
秘書官

大臣
次官

1363

電信課長

1363

成功セル旨ヲ傳ヘ二十日ノ當地英漢字紙（「ノース、チヤイナ、デ
イーリー、ニュース」ヲ除ク）ハ何レモ之ヲ掲載シ居レリ
大臣、天津、南京へ轉電セリ

外務省

S 1.1.1.0 - 73 702 318

0495

支那地方行政系原簿
北支政況
自漢口復

昭和10 二〇八三一

12.28略

上海

廿 日後發

情、亞

廣田外務大臣

第一一三四號

廿日新聞報社説

有吉大使

冀察政務委員會ハ表面上先ノ政務整理委員會ト大差無キ如クナルモ
憂慮スヘキハ實際ノ運用問題ニシテ次ノ點ヲ注意セサルヘカラス即
チ現今河北省ノ軍隊ハ段々ト減セラレ數年前ノ十分ノ一二減シ治安
ノ維持ニモ相當ノ困難ヲ感シツツアル状態ナリ斯ノ如クニ推移セハ
遂ニハ河北省全體不駐兵區域トナルヘシ斯テハ如何ニシテ領土ノ完
成、治安ノ保障ヲ保持シ得ルヤ更ニ一方日本ノ駐屯軍増加ノコトア

外務省

S 1.1.1.0 - 73

703

319

0496

寫送先

30°

東亞 歐亞 米洲 通商 條約 情報 文書 調查 文人 會計 秘書官

大臣 次官

電信課長

1363

昭和 10 二〇八六四 暗 漢口 本省 十二月廿一日 前着 情、亞

廣田外務大臣 三浦總領事

第三八二號

往電第三五五號ニ關シ

其ノ後各漢字紙ハ十二月十四、五日迄即チ冀察政務委員會ノ成立ニ依リ全然中央ト獨立セル政治組織ノ出現ヲ見ルモノニアラストノ疑念ヲ有シタル間ハ引續キ民意ノ發揚、領土主權ノ擁護等ヲ高調シ居リタル處其ノ後北支ノ事態漸次緩和シ前記委員會ノ組織内容、各委員ノ顔觸等モ當初危惧シタル程ノモノニアラサルコト分明スルヤ論調次第ニ緩和化シ十八日同委員會ノ成立ニ對シテモ十九日各紙力其

發送濟 外務省

S 1.1.1.0 - 73

705 321

12.23

0498

299

1363

北平、天津、南京へ轉電シ上海へ轉報セリ

リ實際ノ大問題ナリ又日本側ハ冀東ハ冀察政務委員會ノ範圍外ナリト言明シタリトノコトナルモ斯ノ如キ沽協定ヲ無視シ河北省ヲ分解セシムルカ如キモノハ極力折衝シ是正セサルヘカラス更ニ又察哈爾省カ李守伸部隊ニ侵入サレツツアルコト最モ注意セサルヘカラス云々

外務省

S 1.1.1.0 - 73

704.320

0497

2,01

1263

ノ正式成立ヲ稍自立チテ報道シ居タル以上ニ、三新聞カ「民意ノ尊
 重」又ハ「宋哲元ノ所謂民意」ナル題下ニ短評ヲ掲ケタルノミニテ
 二十日ノ各紙モ本件ニ關シ何等論評ヲ試ミタルモノナシ御參考迄
 支、北平、在支各總領事、厦門へ轉電シ重慶、宜昌、長沙、沙市、
 九江、鄭州へ暗送セリ
 支ヨリ上海へ轉報アリタシ

外務省

S 1.1.10 - 73

706 322

0499

REEL No. A-0197

0596

アジア歴史資料センター

大臣 次官 東亞 歐亞 米洲 通商 條約 情報 文書 調查 人事 文書 會計 秘書官

寫送先

電信課長

1363

昭和10 二〇九四七 12.26 平 倫敦 廿一日後發 本省 十二月廿二日前着 情、亞

廣田外務大臣 第四一八號 往電第四〇八號ニ關シ

其ノ後當地新聞ハ塘沽ニ於ケル戰區特別警察隊ト商震軍トノ衝突、沽源、寶昌、張北等ヲ含ム察哈爾六縣ノ讓渡方ニ關スル日本軍ノ申入、北平、天津、上海等ニ於ケル學生ノ「デモ」冀察政務委員會ノ正式成立、有吉大使ト蔣介石トノ會談、日滿軍ノ「ポイルノール」西南地點ニ於ケル外蒙軍襲撃等ヲ傳ヘ日滿蒙衝突ノ報ハ過般ノ滿洲里交渉ノ決裂、最近外蒙古首相、陸相等ノ露都訪問等ト關聯シ相當

外務省

支那地方政況并係雜頁本
北支政況
自略百題

S 1.1.1.0 - 73 707 323 0500

303

1363

在歐各大使、米、壽府ニ郵送セリ

外務省

S 1.1.1.0 - 73

709 325

0502

302

1363

注意ヲ喚起シ居ル處特情所報ノ「タイムス」論說ヲ除キ二十一日ノ「メール」ハ米國上院外交委員長ノ「ロータリー」俱樂部ニ於ケル演說ニ關聯シ其ノ所說ヲ暴論ナリトシ英國ハ最早支那ニ於テ防護スヘキ緊切ナル利益ヲ有セス英國貿易ノ大分ハ日支工場ノ競争ニ依リ消失セリト論スル外論評ヲ見ス尙二十一日ノ「テレグラフ」ハ外蒙古亡命客「プリンス、エンツルガ」ナル者ノ實見談トシテ主トシテ西比利亞種族民ヨリ成ル約一萬ノ外人部隊庫倫ニ於テ露國大官ノ下ニ密ニ訓練中ニテ「ボイルノール」ノ近傍及主要地點ニモ大体同勢力ノ軍隊ヲ置キ居ル處何レモ庫倫ノ指揮下ニアリ哈府、莫斯科、知多ト無線聯絡ヲ取リツツアリ庫倫ニハ飛行場三箇所建造セラレ兵營等急設中ナリトノ北平特電ヲ掲ケ居レリ

外務省

S 1.1.1.0 - 73

324
708

0501

205

1363

外務省

ノ具體的實例ナリ又南米其ノ他各國ニ於ケル日本商品及財力ノ進出
 ハ何人モ否定シ得サル事實ナリトノ趣旨ノ論評ヲ掲ケタリ
 管下各領事へ暗送セリ

S 1.1.1.0 -73

711 327

6504

寫送先

東亞 歐亞 米洲 通商 條約 情報 文書 調查 人事 文書 會計 會社 秘書官

大臣 官

電信課長

1363

外務省

北支事件其ノ他日支關係ニ付當國新聞ハ「アパス」並ニU、P筋ノ
 報道ヲ連日多量掲載シ居ル處是等報道中動モスレハ讀者ニ對シ日本
 ハ中華民國ニ對シ侵略的進出ヲ實現セントスルモノナリトノ印象ヲ
 與フル種類ノモノ鮮カラサル處最近「ピットマン」對日聲明カ當方
 ニ傳ハルヤ多數新聞ハ之ヲ掲載シ特ニ二十一日「ジョルナル」ド、
 ブラジル」ハ「ピ」ノ指摘スル日本ノ脅威ハ世界周知ノ事實ニシテ
 日本帝國主義ハ世界ノ諸國ニ對スル恐ルヘキ危險ナリ中華民國ハ其

第二三九號

廣田外務大臣

澤田大使

昭和10

二〇九五三

12.26 暗

リオ

本省 十二月廿二日前着

情

支那地方政況
 北支政況
 自治

S 1.1.1.0 -73

710

326

6503

307

1363

十二月十九日附 晨報、新聞報
 十二月二十日附 申報、晨報、中華日報、時事新報、民報
 以上

在中華民國上海日本大使館

S 1.1.1.0 - 73

713 329

0506

306

A/1/10/21-27

東亞局

1363

大第九二九號
 昭和十年十二月二十三日
 在中華民國
 特命全權大使 有吉
 外務大臣 廣田 弘 毅 殿
 學生運動ニ關スル件
 本件ニ關スル別記各漢字紙論說ハ概要及電報置キタル處何等御參考
 迄ニ右切抜茲ニ送付ス
 記

在中華民國上海日本大使館

S 1.1.1.0 - 73

712 328

0505

REEL No. A-0197

0601

アジア歴史資料センター